

スタッフ紹介

センター長 小玉 重夫 (教育学研究科 基礎教育学コース 教授)
副センター長・研究員 藤江 康彦 (教育学研究科 教職開発コース 准教授)
研究員 村上 祐介 (教育学研究科 学校開発政策コース 准教授)
運営委員 牧野 篤 (教育学研究科 生涯学習基盤経営コース 教授)
運営委員 恒吉 僚子 (教育学研究科 比較教育社会学コース 教授)
専任スタッフ 植阪 友理 (教育学研究科 学校教育高度化センター 助教)
外国人客員教授 韓 崇熙 (ソウル大学教育学科)
外国人客員准教授 Marilyn J. Ivy (コロンビア大学文化人類学科)
教務補佐 田中 麻紗子 (教育学研究科 教育心理学コースD3博士課程)
協力研究員 村松 灯 (基礎教育学コースD1)
協力研究員 園部 友里恵 (生涯学習基盤経営コースD1)
協力研究員 譚 君怡 (比較教育社会学コースD3)
協力研究員 富田 知世 (比較教育社会学コースD1)
協力研究員 齋藤 崇徳 (比較教育社会学コースD2)
協力研究員 櫻井 直輝 (学校開発政策コースD2)
学術支援職員 高橋 徳子 (教育学研究科 学校教育高度化センター)



センター長

小玉 重夫 (基礎教育学コース 教授)

教育における人間と政治、社会との関係を思想研究によって問い直すことを研究テーマとしている。特に、ふだん自明のものとしてうけいれられている「教育」や「学校」を、歴史的・構造的な視点から相対化し、そのうえで、教育改革の筋道を追究していくことを当面の研究課題としている。具体的には、教育の公共性に関する思想研究、公共性の担い手を育てるシティズンシップ(市民性)教育、政治的リテラシーの問題などにとりくんで

いる。

今年度からは、科学研究費補助金基盤研究A「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」が始まり、研究代表者として、研究プロジェクト全体の調整と統括を行った。また、その延長線上で、個人としては、政治的シティズンシップの教育に焦点化した理論的探究を進め、日本教育社会学会第63回大会(2011年9月24日)、The 10th Annual Hawaii International Conference on Education(2012年1月5日)で学会発表を行った。

また、対外的には、政治教育のあり方を検討する総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」に委員として参加し、最終報告書「社会に参加し、自ら考え、自ら判断する主権者を目指して

～新たなステージ「主権者教育」へ～(2012年1月10日発表)の作成に関わった。



副センター長・研究員

藤江 康彦

(教育学研究科・教職開発コース・准教授)

学校における子どもや教師の学習と発達およびそれを支える環境のあり方について、教育心理学、教育方法学、学習科学などの研究知見に学び、学校でのフィールドワークやコンサルテーションを行いながら追究しています。授業における談話空間の社会文化的構成と子どもの学習との関係性、教師の学習や熟達を支える校内研修や学校組織のあり方、幼小連携や小中連携などの校種間連携による子どもや教師の学校参加や活動の変容、などに関心があります。

〈主要著書〉

- 『発達科学ハンドブック 6：発達と支援』新曜社、2012年（分担執筆）
- 『授業研究と学習過程』放送大学教育振興会、2010年（共著）
- 『はじめての質的研究法：教育・学習編』東京図書、2006年（共編著）



研究員

村上 祐介

(教育学研究科 学校開発政策コース・准教授)

現代民主政における教育政策・行政は高度な専門性が求められる一方で、政治家や市民による民主的統制も必要とされています。しかし、この二つの要素は両立しがたい側面があり、どのように両者のバランスを図るかが問われています。こうした観点から、戦後日本の教育行政の特質を検討すると同時に、民主的統制と専門性の在り方が教育政策に与える影響を分析しています。

〈主要著書〉

- 『教育行政の政治学—教育委員会制度の実態と改革に関する実証的研究』（木鐸社、2011年）
- 『地方政治と教育行財政改革』（共編著、福村出版、2012年）
- 『テキストブック地方自治 第2版』（分担執筆、東洋経済新報社、2010年）



運営委員

牧野 篤 (生涯学習基盤経営コース 教授)

人が生活を営み、成長していく過程に現われる様々な事象を通して、社会のあり方を考え、人が幸せに暮らすために何ができるのかを考えることに興味があります。曖昧な人間と社会を対象とするが故に曖昧な学問である社会教育・生涯学習は、その曖昧さが魅力です。専門はもともと中国近代教育思想、今はそれに加えて社会教育・生涯学習を担当。中国・台湾のコミュニティ教育・少子高齢化問題、日本のまちづくりや高齢化と過疎化問題の調査などに関わり、各地でまちづくりの実践を展開しています。学生・院生を連れて、がやがやとにぎやかに調査・実践に出かけています。人が行き交い、自由に議論する雑踏のような研究室を目指しています。

〈主要著書〉

- 『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと』、大学教育出版、2012年
- 『認められたい欲望と過剰な自己語り—そして居合わせた他者・過去とともにある私へ』、東京大学出版会、2011年
- 『シニア世代の学びと社会—大学がしかける知の循環』、勁草書房、2009年
- 『中国変動社会の教育—流動化する個人と市場主義への対応』、勁草書房、2006年
- 『〈わたし〉の再構築と社会・生涯教育—グローバル化・少子高齢社会そして大学』、大学教育出版、2005年



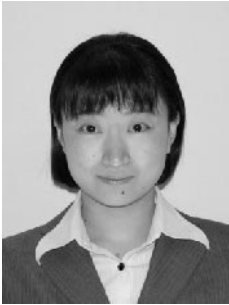
運営委員

恒吉 僚子 (比較教育社会学コース 教授)

日米を中心に、学校や子どもの社会化過程の国際比較研究をしています。教室の中での対人関係等のミクロな世界と、教室が置かれたより広い社会的文脈をつなぎながら、日本の教育システムの特徴や、教育改革のあり方についても比較研究をしてまいりました。また、マージナルな立場にある人々(例 民族的マイノリティ)を通して社会の課題を浮き彫りにしていくような、文化の境界線からの研究にも取り組んでまいりました。

〈主要著書〉

- 『人間形成の日米比較—かくれたカリキュラム』
中公新書、1992年
- 『子どもたちの三つの「危機」』勁草書房、2008年
- The Japanese Model of Schooling: Comparisons with the United States.* RoutledgeFalmer、2001年
- Minorities and Education in Multicultural Japan: An Interactive Perspective.* (共編) Routledge、2010年



植阪 友理

(教育学研究科 学校教育高度化センター 助教)

「～が分からなくて困っている」といった学習上のつまずきに対して、認知心理学を生かしながら個別に診断・支援する実践的研究活動（認知カウンセリング）にながくたずさわってきた。このような活動を通じて、従来の心理学の理論では十分に検討されてこなかったテーマを見出し、心理学の基礎研究へと結びつけている。例えば、学校教育における学び方の指導の不十分さや、つまずきの診断するテストの不在といった問題意識を踏まえ、新たな指導法開発やテスト開発にかかわってきた。こうした研究活動の延長として、現在では学校の教師とともに、学校の中での個別学習支援の場づくりや、テストを生じた授業づくりなどを行っている。学位論文では、実践的研究活動から心理学の基礎研究を立ち上げ、さらに実践の中でも利用へと結びつける一連の活動をREAL (Researching by Extracting, Analyzing and Liking) アプローチと名付けて提案し、「教師は多くの図表を使って教えているにもかかわらず、児童・生徒はなかなか自発的に図表を利用しない」という学び方の問題について、このアプローチを用いた一連の研究を展開させた。現在は、当センターの専任助教として、センターにおける研究活動を支援している。



外国客員教授

韓 崇熙 (ソウル大学教育学科)

韓崇熙教授は、韓国のソウル大学教育学科（生涯教育専攻）に所属する韓国を代表する生涯教育研究者である。とくに、生態主義的観点から生涯学習をとらえる学習生態系理論に注目し、これまで数多くの研究成果を上げており、批判的成人教育や生涯学習の国際比較研究も行っている。韓教授は教育改革研究に関する国家プロジェクト（BK21）の主任を担うとともに、ユネスコのCONFINTEA VI（The Sixth International Conference on Adult Education）報告書の執筆者や生涯学習に関する国内外の主要ジャーナルの編集委員もつとめている。

韓教授は、2012年6月11日から7月10日までの1か月間本センターの客員教授として来日し、主に日本をはじめとする東アジアの教育文化と西洋教育文化の比較研究を行った。また、学習社会論についての講演を行い、院生の指導にも尽力していただいた。（牧野 篤）



外国人客員准教授

Marilyn J. Ivy (コロンビア大学文化人類学科)

M. アイヴィ准教授は、米国における文化人類学研究教育揺籃の地であるコロンビア大学文化人類学科において、大学院教育の責任者を務め、また米国における権威ある文化人類学やアジア研究に関する学術雑誌の創刊や編集活動において中心的役割を果たしてきた研究者であり、米国における日本文化研究に重要な影響力をもつことで知られる。

研究者としてのアイヴィ准教授は、日本社会の近代化過程における戦争やその他の政治思想的側面に目を向ける一方で、そうした歴史的経験が近代日本の美学の領域においてどのように表現され、また芸術としてどのような独自の展開をしてきたのか、深い洞察力をもって研究を重ねてきた。

今回は2012年10月8日から12月8日までの二か月間、本センターの客員教授として来日し、「フクシマ後の日本における芸術と教育」という研究テーマのもとに、震災および福島原発事故後の日本における目覚ましい芸術創造および教育的情報伝達活動の調査研究を行い、また学内外で講演を行い、学部生及び院生の指導にも尽力いただいた。

この招聘において、今後、アメリカにおける現代日本理解、特にフクシマ後の日本の新たな芸術創造表現および教育状況に関する理解を大いに促進することが期待される。(白石さや)

教務補佐

田中 麻紗子

(東京大学大学院教育学研究科博士課程)

2012年7月より学校教育高度化センターの教務補佐として勤務している。産休(2012年10月10日～2013年1月23日)および育休(2013年1月24日～2013年3月31日)を取得中の植阪友理助教の補佐も兼ねており、教務業務および事務業務の両面から、学校教育高度化センターの業務を担っている。

協力研究員

村松 灯(基礎教育学コースD1)

院生プロジェクト「シティズンシップ教育における教化と教育の問題—現代イギリスにおけるモデル・カリキュラムに着目して—」のプロジェクトリーダーを務めた。

協力研究員

園部 友里恵(生涯学習基盤経営コースD1)

院生プロジェクト「農山村における地域とともにある学校づくり—長野県木島平村のコミュニティ・スクール構想を事例として—」のプロジェクトリーダーを務めた。

協力研究員

譚 君怡(比較教育社会学コースD3)

院生プロジェクト「日本の高等教育におけるグローバル人材の育成—留学生、帰国生の入試と教育に着目して—」のプロジェクトリーダーを務めた。

協力研究員

富田 知世(比較教育社会学コースD1)

院生プロジェクト「探究学習と大学の学習および将来展望とのレリバンス：岡山県立岡山操山中学校・高校の未来航路プロジェクトを事例として」のプロジェクトリーダーを務めた。

協力研究員

齋藤 崇徳（比較教育社会学コースD2）

院生プロジェクト「教育研究におけるディシプリン間の相違と関係性——教育学と教育社会学の対立に着目して——」のプロジェクトリーダーを務めた。

協力研究員

櫻井 直輝（学校開発政策コースD2）

院生プロジェクト「カリキュラム形成に関わる教職の専門性・専門職性の研究」のプロジェクトリーダーを務めた。

学術支援職員

高橋 徳子

（教育学研究科 学校教育高度化センター）

2011年度より当センターが中心となって行っている科学研究費補助金基盤研究A「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」（通称イノベーション科研）を軸に、センターの研究活動が加速されている。この研究の支援を行うために、2011年10月より非常勤職員として勤務している。本年報の作成にも携わった。